

サハラ大行進と非暴力直接行動

笠田七尾

「民間人であれ、軍人であれ、スペイン人に出会えば、あいさつして抱擁を与えよ。発砲されたなら、信念で武装して行進を続けよ」

「モロッコはサハラのスペイン部隊との対決を望まない。行進参加者は、地図にはあっても、われわれにとっては境界ではない線を越えているにすぎない」

「ゴー」。ハッサン・モロッコ国王の号令一下、三万といわれる群衆がスペイン領サハラへ越境を開始した。

七五年一月、突如視野に入ってきたモロッコのサハラ大行進は、非暴力による闘争手段を駆使したことによって、ひととき僕を夢中にさせた。

スペイン領サハラでの出来事が報道され始めた時、そ

こで何が起きているのか僕は明確に理解できなかった。とにかく、一国規模の巨大な非暴力闘争が開始されようとしている。ということだけが増幅された形で関心を引きつけた。

が、やがて、「複雑な国際バズル」とも呼ばれたその勢が徐々に報道されるにつれ、サハラ大行進への僕の思い入れは見事に打ち砕かれた。アルジェリアとモロッコの武力衝突、そしてエジプトによる調停、という新たな段階を向かえたいま、サハラ大行進といわれたものがモロッコの国内政治対策と、スペイン領サハラのリン鉱石獲得のための演出された官製デモであった、ということとは間違いないところである。

ハッサン国王は、これを八三五万人平和大行進Vと自称し、「父祖の故郷への帰還」であることを一貫して前面に押し出すことによって、本質的な侵略性をおよいか

くした。それは、あたかも人民による非暴力直接行動であるかのような印象を内外に与え、サハラ大行進の侵略を正当化することに成功した。

その結果が、その後のスペイン・モリタニア間との交渉でも、状況をモロッコに有利に進展させていることは周知のとおりであろう。

スペイン軍の武力抵抗もなく、三日間で国境の南一二キロの地点まで侵略させたという一事を見ても、サハラ大行進の非暴力侵略は武力による侵略より、はるかに強大にして効果的な力を発揮した。

あるいは、サハラ大行進は結局何も問題を解決できなかったではないかと言われるかも知れない。しかし、武力によったならば、なおさら問題を解決できなかったであろうことは明らかである。また、サハラ大行進の成功は、彼等が非武装であったからスペイン軍が加減したにすぎないという指摘に対しては、正にそのとおりである。非暴力による闘争は、ひとつに敵の武器使用を封じ込む作用がある。スペイン軍の暴力的対応の躊躇は、このことを示している。

さて、日々の生活に必要なものを作り出す生産を始め

僕等の日常生活は非暴力の状態において始めて十全に達成し得る。この非暴力は、本来、国家権力によって作られたものではなく、人民自身によって生み出されるものである。一方、国家権力は、それを構成する官僚であろうと資本家であろうと、彼等は自己の力で何ものも生産し、創造することはない。国家権力の維持を保証するのは、たとえ暴力機構の合法的独占であり、暴力機構で人民をドウカツし、搾取する以外、彼等の自己保存策はない。このように、本質的に人民は非暴力的存在であり、国家は暴力的存在である。

国家は人民の生産労働を収奪することで成り立ち、その生産労働は、非暴力の状態によって確保される。それ故、国家権力は暴力を本質としながらも、人民の属性としての非暴力性に依拠せざるを得ない。こゝに、国家権力と人民のりよう者は、一見、相呼応して権力の恣意的暴力を内包したΛ疑似非暴力体制Vを形作る。

疑似非暴力体制下の非暴力とは、人民にとっては安穩に日常生活を営むための状況にすぎず、また、国家権力にとっては国家を維持するための状況というだけのことであり、国家に鋭く対立するものではない。確かに、日常生活を営むための非暴力は、それは単にΛ非暴力状況

Vというだけであって、未だハ力Vとはなり得ていないのである。

ところが、ハッサン国王の演出したサハラ大行進は、この人民自身でさえ意識しなかった非暴力に、「父祖の故郷への帰還」という目標と、ハ集まるVハ歩くVという運動を与えることによって非暴力状況を、力としての非暴力闘争となし得たのである。しかし、残念ながら、国家権力の闘争手段としてであるが――。

人民が己れ自身の属性である非暴力を意識し、動的非暴力・力としての非暴力に覚醒することを国家権力は最も恐れている。サハラ大行進が軍隊に監視された、いわばオリのなかの行進であったことは、人民が動的非暴力・力としての非暴力に目覚めることを警戒したが故なのである。

非暴力闘争は、人民の闘争手段そのものであると同時に、国家権力も、これを使いこなせるということをサハラ大行進は示した。非暴力でさえあれば反権力の闘争だという安易な図式は、もはや通用しない。

そこで、サハラ大行進や疑似非暴力体制下に日常的に汚されている非暴力を、僕等は如何にして力として奪還してゆかねばならないのだろうか。

僕等は、先づ、非暴力が直接行動と一体化した時始めて非暴力が力として現われる、ということを確認する必要がある。直接行動とは、①自己の個人責任において、人民自身の必要とするものを勝ち取ることであり、②政治と呼ばれる一切の間接手段を排除した、合法・非合法を越えた行為であり、③自立的に日々の営みを管理することである。つまり、人民の非暴力闘争とはハ非暴力直接行動Vと呼ばれるべきものであり、国家権力の振り回す非暴力闘争とは明確に一線を画する。

サハラ大行進ではうまく利用されたが、国家権力も非暴力の意味を未だ明確には捉えていない今、反権力・反国家に貫かれた、自治管理を目指す僕等自身の非暴力直接行動を、日常的に構築・拡大することによって疑似非暴力体制の質を変え、欺瞞的非暴力闘争を打破してゆかねばならない。武器を奪いつくされた後に、武装闘争を繰り返さないために――。

ところで、サハラ大行進と同じころ計画された、フランスに亡命しているバスク民族主義者グループによる、ハスペイン大行進Vのその後はどうなったのだろうか。それは、「欧州最後の独裁体制打倒」を掲げ、フランスの港町サンジャンドリュスからスペイン国境のアンデー

まで、五万人の人達が行進するはずだったという。サハラ大行進から影響を受けて計画された、このスペイン大行進の帰趨を知りたいものである。

久米島訴訟

を

支える会

ていることはない——と一晩中ねむれなかった。それほどこの本との出会いはシヨックだった。そして僕は久米島訴訟を支える会に加わることになった。

——沖繩は日本敗戦の二ヶ月まえ昭和二十年六月二三日に、牛島最高司令官の自決によって全面降伏した。

はじめは桑田博さんの話からだった。それから富村順一さんの「最敬礼拒否の足跡——戦犯天皇を裁く」と

とところがその降伏で立場を失った日本軍は、沖繩全島で推定千名以上の

「哀号」あきよう／天皇／沖繩で虐殺された朝鮮人と久米島々民の痛恨

の人たちを虐殺したといわれている。そして久米島でも、日本軍守備隊は

碑建設のためにVを読んだ。読み進むうちに、ぼくは何度も頁を閉じて、

六月二七日から八月二十日までのあいだ、乳幼児を含め七家族二十名を

胸のとよろきをおさえねばならなかった。何も知らない——ということほど

に狂った。しかもその直後この部隊は全く無傷のまま米軍に投降し、全員無事に本土へと帰還したのである。

ど時によってはおそろしい罪を犯した。しかもその直後この部隊は全く無傷のまま米軍に投降し、全員無事に本土へと帰還したのである。

以来三十年、この本土と沖繩の関係を露わに象徴する事件に対して、政府は賠償どころか陳謝すらすることもなく、責任をうやむやにしていた。そして私たちもまた……

久米島訴訟を支える会は、せめて遺族の国家賠償訴訟を助けたという思いから発足し、沖繩敗戦記念日六月二三日に集会、八月十八日現地集会のために準備を進めている。この小文でこのことを知ったあなた……

連絡先 桑田博——東京都練馬区北町一—三〇—一三、または向井孝

現代暴力論ノート きよん で しのだもりの

直接行動について、私が理解できた限りのことを、何度かまとめてみようとしたが、遂に仕上げることはできませんでした。

そして、結論的に、 $\wedge$ 現代暴力論ノートVを読み、ある程度理解し共鳴もした事が、まるで自分自身の考えでもあるような錯覚を起していたにすぎないと、自覚できました。ひどくはずかしいと思いましたが、これを手がかりに考えが深められるなら、私にとっては大した事なのだからと、自らなくさめたような次第です。

全く、まだ一度もデモに参加した事もなく坐りこみもやった事もないのに、いっばし $\wedge$ 非暴力直接行動Vを云々するのは口はよったと思いますすが $\wedge$ 現代暴力論ノートVの読後感想として、幼稚ながら昂揚した気持ちをお伝えします。

最初通読した時の私は、たとえるならば大きなソナタ

を聞いた時、繰返し迫ってくる主題に圧倒されてしまったという状態でした。その主題とは $\wedge$ 疑似非暴力体制Vとしてある国家権力組織（社会暴力）を攻撃するのに、 $\wedge$ 直接行動Vを以ってせよ。という事です、人民が国家からうばわれたいものを、人民自らの手で取りもどせという、力強い呼びかけでもありました。

第一章と第二章は、暴力論の前提としてのべられた、戦争論・国家論・権力論ですが、全篇を読みて再びこの二章にもどってきた時、それは総論としてすべてを語りつくしていたのだと、改めて感動をおぼえたことでした。

この論文の中心である暴力論は、懇切な論旨の進行によりよく理解できたので、私はまるで自分で書いた言葉のように思いうかべることがができます。

「暴力というとき私たちは $\wedge$ 権力Vを思いうかべるまえに、きわめてフィジカルなもの―日常生活で出合うケンカやタカリ、傷害をまず考え、感覚的な苦痛や恐怖を想起している。」

「私たちの全日常生活を支配し侵害するものとして、

いま真に決定的な意味を持つのは△個人的暴力▽が△社会的暴力▽として質的転換をとげて、見えなくなった時である。」

私たちが戦争に思いをはせたり、反体制運動を考えるときよくいわれる言葉。

「自分が殺されるのはいやだから、人は殺さない。」

「打たれるのはいやだから、自分も人を打たない。」

この人間らしい心情も、△個人暴力▽の意味が解明されると、権力組織という社会暴力に対応する時には、ほとんど無意味であることを知らされました。

△個人暴力が本来善悪の価値と別のものであるにもかかわらず、国家権力のモラルによって最大の悪とされる。▽

この言葉も、私にとっては常識を打ちくだく大きな衝撃でした。

また、△疑似非暴力体制▽内で飼いならされた私の中の日常性が、受入れることをためらっていた△少数前衛の起爆的暴力行為▽たとえば△狼たち▽を、反暴力・疑似暴力と理解し、彼等の本質志向に、改めて賛同したことでした。

論旨が暴力論を経て読者をみちびく処は、秩序として

われわれの前にある△疑似非暴力権力▽を破綻させ、その本質である暴力を引出すこと、またその暴力との闘いに、どの道を選ばねばならないかということです。もちろんこゝで△直接行動▽をあげられています。

△直接行動▽の意味は△ガンジーの塩行進▽を具体例とされても、一言では言いつくせないものゝようですが私は塩行進の中のべられた六ヶ条の解明で充分納得できました。

更に次の要約は、現在の体制内状況では、私たちが実直に働けば働くほど、敵を肥え太らせるという無残な結果にしかならないことを明らかにします。

「直接行動の本質は第一に△生産労働▽そのものである。第二にそれは創造活動である。」

「私たちの日々の営みである△生産労働▽は、それが継続し△再生産▽されるためには、何よりも△非暴力的日常▽でなければならぬ。△暴力▽と闘うことも含めて直接行動は非暴力の基盤をはなれては疑似的にしか存在しない。直接行動が自らの必要とするものをえるための——自己自身のための生産労働であり、他者のための生産労働ではない——ということ、非暴力がもつその本質である——△自治管理▽とむすびつく。」

『現在私たちのΛ生産労働Vは実はΛ自己の労働力を商品として資本に売るVことであり、直接行動が本来的に非暴力状況におけるΛ生産労働VΛ創造活動Vであるなら、われわれの現状は、Λ疑似非暴力体制Vの下にあるΛ疑似生産労働Vでしかあり得ない。こんな体制内からめとられた状況のもとで行われる私たちの闘いは、正確に言えばΛ直接行動そのものとしてでなくVまずΛ直接行動の回復奪権の闘いである。VそれはΛ自己を労働疎外からとりもどしVΛ疑似生産労働を自己のためのものとするための闘いである。V』

こんな風に一部分書きぬくと、やゝ繁雑に思える説明も、私には意をつくした語りかけでした。

私は長年自分の口を養うことに追われて、何の運動にも参加しませんでした、それでも体制の就縛からのがれ、自分自身の主人でありたいと思いつとけてきました。

しかし、闘おうと思った時、私は何という長いうむ事のない闘いを必要とすることでしょう。私の闘いは、今までにこれが平和と思ひこんでいたΛ疑似平和Vつまり飼ひならされた無気力から脱する事から始まります。

そして、日常を自己変革の場とするために、Λ革命の連続的日常化VΛ日常生活の革命運動化VΛ革命運動の

土着化Vを創出する闘いをたゞかわねばならないと思うのです。

読者会開催の予告

創刊号が出たので、その記念という意味で東京と大阪その他で読者会をひらきたいと計画しています。五月の中・下旬頃、東京の場所には渋谷山手教会裏の住民広場のつもり。
ハガキで五月七日までにお問合せ下さればお知らせします。

編集部(風)

鈴木国男さんの死

もう七年まえのこと。新宿地下広場の通路で、山谷の人達のうしろに坐り込んでいると、私の頭の上にふわりとヘルメットがのった。

ふりむくと、背が高くがっしりしたからだのひとが「どこからきたの？」ときいた。「どこのグループでもなくて、ひとりなの」

「じゃあ、ぼくとおなじだね。ぼくは禁酒禁煙一人同盟だよ」とわらった。とてもやさしい声だった。それが当時山谷合同労組書記長をしていた鈴木国男さんだった。

その鈴木さんが死んだ、大阪拘置所の保護房のなかで!!

二月一日鈴木さんは殺人未遂容疑で逮捕され、拘置所へ送られた。

友人のHさんは四回も面会にいったが拒否されたので、広島にいるお母さんと連絡し、二月十六日午後一時ようやく手続ができた。お母さんは庶務課へ引き入れられ、鈴木さんの房内での狂乱状態をくどくどと二十分も聞かされたあげく、「早く会わして下さい」という言葉で、はじめて、その日午前二時、看守が房へ入って毛布をめぐってみたら死んでいた—という事実が告げられたのである。

遺品を引取りに都島署へいくとしきりに早く火葬許可願いに署名捺印をすることをすゝめられた。そして司法解ぼうが終った遺体を引取ったときはもう夜中の一時をすぎていた。

かけつけた人達で遺体を調べると多くの外傷があった。りよう前腕外側、左肩、左腰部、りよう下肢前面背中、腹部、でん部など二〇ヶ所近く打撲や挫傷がのこっていた。大拘の説明だと自損行為としか考えられぬという。全面ラバーが張ってある保護房で、である。そして死体検案書は死因不詳。だがどう考えても殺されたとしか言いようがない。

最近、ニュースA救援V等で報じられる獄中弾圧は、ひましにエスカレーターの光をみせている。それは市民社会への強迫であり、それを通じて反権力運動と市民を分断するねらいがこめられている。WRIとして監視できぬ問題として、積極的な関心を訴えたい。

(風太郎)

危険な言語

迫害のなみのエスperanto

(紹介)

ウルリヒ・リンス著 (岩波新書)

☆…ソビエトに亡命していた外国のエスperanto者たちも、この大量検挙からのがれることはできなかった。機関紙『インテルナツィオナル』の編集者だったバツタ・ヨージェフ、一九一九年にできたハンガリー・ソビエト共和国の郵政人民委員代理の息子だったロビチエク・フエレンツ、たとえばこの二人が最後にどういう運命をたどったかを知る資料はない。(本書一六〇頁)

☆…S・N・ボドカミネルは、回想している。

「一九三七年、レニングラードのエスperanto者たち主なもの一四名が逮捕され、われわれは家でふるえながら順番を待っていた」…巨大な逮捕機械は平のエスperanto者たちをも、音も立てずしかし止めるにも止めようがなく、次々と呑みこん

でいった。リチコフが一九三八年三月のある夜逮捕された時、彼は翻訳の仕事でルビヤンカ監獄へ連れてこられたのだ、とまじめに思った。ところでこの悪名高い拷問地獄へ来て初めて彼は、本当の原因を知ったのである。逮捕されたエスperanto者はみなそうだったが、彼も次のような紋切り型の非難を聞かされたのである。「お前は、ソビエト・エスperanto同盟の名のもとにソビエト内にひそんでいる、国際スパイ組織の積極的メンバーなのだ。」リチコフと同じように何千というソビエト・エスperanto同盟の会員たちは、シベリアの収容所で長年過重な懲役の仕事に苦しまなければならなかった。正確な数字はおそらく永久にわかるまい。しかし、リチコフによると、約三万名のエスperanto者が逮捕され、そのうちきわめて少数しか帰ってこなかった。名の通ったエスperanto者では、一九五五年に釈放されたデミジエクたど一人である。(本書一六二頁)

エスperantoが人工の世界共通語のことであると知っている人は多くても、それがどんな言語か、知っている

人は少ない。まして、それが誕生以来どんな歴史を経てきたか知っている人はさらに少なくなる。しかもその歴史さえも今まではぼっかりと大きな穴のあいた不完全なものでしか知られていなかった。本書は、その大きな穴しかもほとんど正人の眼から陰蔽されていたエスペラントへの迫害の歴史を発掘しエスペラントの意義をより正しく評価することを可能にさせたのである。訳者は、はしがきで本書を要約して次のように記している。

『本書は、一八八七年、この人工国際語をワルシャワのユダヤ人青年医師ザメンホフが初めて世界に発表して以来、いかに各国の独裁者たち、圧政者たちがそれを危険視し、迫害し、そのための運動を弾圧したか。またいかに彼等が、エスペラントを学び使うだけでなく、世にひろめるために努力する、エスペラントたちの妨害をし、逮捕・投獄したばかりでなく、殺しさえしたか、そしてエスペラントたちがいかにそれに抵抗したかをしるしたものである。』

著者リンスの論じていることは、迫害の歴史の表面的記述だけではない。迫害の根拠となった政治的な変化や為政者の、とくに言語政策について詳しく論及する。読者は国家と言語との関係を、そこから逆説的に明らかに

されたエスペラントの意義と同時に理解できるのであり個々の為政者等がなした発言の数多い例証は、我々に観念的にはなく、具体的に理解することを可能にさせている。そこで述べられている言語政策の基調となっているものは言語帝国主義と呼ばれるものであり、帝国主義の言語政策イデオロギーである。それが容易に他民族語への差別・偏見・抑圧へと結びつくことと理解するのはむずかしい。その言語帝国主義がエスペラントを迫害するうえで、いかに機能したかを著者は例証していき、迫害の要因となった一つであると結論する。

本書の力点は、もっとも迫害のひどかったナチス・ドイツとソビエトでの弾圧の歴史と理由を明らかにすることに置かれている。迫害する側の理論・方法、される側の抵抗の仕方とそれを支えた理論的基盤を調べていくことによりエスペラントの持つ意義を明らかにしていく。言語帝国主義についての叙述はナチス・ドイツの「純粋ドイツ語」、日本帝国の「朝鮮・台湾での民族語の禁止と日本語の強制」、ソビエトでの「エスペラントの弾圧とそれにかわるロシア語の賞揚」についてさらに詳しく論じられている。

著者はファシストの弾圧の根拠とソビエトでの弾圧

の根拠は同じ理由を共に持っている」と明らかにする。ナチスの弾圧理由は、エスベラントはユダヤ人と共産主義者の言語だという反ユダヤ主義と反共主義、「純粹ドイツ語」として現れた言語帝国主義、それにエスベラントの平和主義的国際主義的であることを許せないナチスの民族主義であり、ソビエトの場合はスターリン体制による大粛清の嵐が吹きあれていたが、一國社会主義建設にとつての邪魔者「国際主義」を粉砕するための「ソビエト愛国主義」と、その言語面での形態であるロシア語の支配確立の必要性であるが、りよう者に共通するのは、なによりもエスベラントによつて国民が国外と意見を交流することを恐れたからである。

叙述は迫害した側にだけ理由を求めることで終っていない。より正しい教訓をひき出すためにエスベラント運動側の恥辱をも容赦なく暴いていく。ナチス・ドイツ下のエスベラント運動指導者の骨のない中立主義や、ナチスの先兵となったエスベランチスト（「ドイツ国民性に奉仕するエスベラント運動」）をも、ソビエトのエスベラント運動指導者の党の方針への追従と、エスベラントについての理論的ぜい弱さ（「エスベラントがヨーロッパのブルジョア的・資本主義的産物であるがぎり、エ

スベラントの言語的遺産を利用するに当って、特別の警戒心を發揮するよう我々を義務づける。」）をも、するどく批判する。

「ドイツのファシストたちもソビエトのスターリン主義者たちも、エスベラントがドイツ語やロシア語の地位をおびやかす、と考えたのである。だが、より重要なのはおそらく、幾多の体制がまず、事実になせよ、たゞそう思われただけにせよ、彼等に反対して闘ったり、彼等権力者たちによる管制なしの国際交流を求めたりした人びとの武器になることを恐れたことだろう。」と述べる。そして、①「ヨーロッパのいくつかの国ですでに実施されている、選ばれた学校におけるエスベラントの実験授業を、もっと多くの国に拡げること。」②「国家同士との共存が、寛容と理解の精神での人間同士の真の共存によつて、実際いつか補完されなければならないのなら正に普通のレベルにおいても、コミユニケーションをおこなう権利が不可欠の前提条件として認められるべきであることを意識し、要求することが必要である。」コミユニケーションを行う権利は基本的人権である。

以上が本書の要約的紹介だが、コミユニケーションの権利は、基本的人権であるという著者の主張は不覚にも

検閲やその他の妨害は「国家」の論理であると半ば暗黙のうちに許容していたことに對して痛切に反省をうながしてくれる。「国境」などにとらわれず、お互いに行き来し、出会い、対話し、情報を交換し、理解しあうのは人民の権利である。エスペラントは、それを何よりも当然のこととして、現実化するものであったがゆえに、世界の諸国家と権力者にとってきわめて「危険な言語」とされたのであった。

エスペラントが発表されて九十年、その間どのような国家権力に依存することなく、むしろ反対に、支配者達のはげしい敵意と迫害をうけながら、なお成長してきたという歴史は、それ自身が人民の言語であるという本質を何よりもよく証明している。

とすればいま、眼の前に存在し、状況として容易に学ぶことができるエスペラントを私たちが無関心のまゝ、人民の力として、闘いの武器として、とりあげずにいる——ということはどういう意味をもつだろうか。

本書が、迫害と弾圧の歴史を通じておのずから明らかにしているものを知るとき、——私たちがエスペラントを学び、さらに積極的に使いこなすことを怠けていることで失っているものゝ大きさと、支配者のひそかな安眠に

気付くだろう。

(—WRIは、世界唯一のエスペラントを英・独語などと共に公用語と定めている組織である。しかしその実用は新しいメンバーの加入と共に、やゝ弱められていることも否めない。もとより語学である以上、一定の学習をしなければならぬという困難はあるにしても、他の言語と比べてはるかにやさしく、独習で可能だという何よりの利点がある。すくなくとも辞書をひける程度の学習を——)

伊藤 博康

※ エスペラントの独習には、入手しやすいものとして
大学書林Λエスペラント四週間Vがある。

